

ダニロ・キシュと中央ヨーロッパ

—— 未完の短篇「アパトリッド」を通して ——

奥 彩 子

序論

旧ユーゴスラヴィアの作家ダニロ・キシュ（1935–1989）が、ベオグラードを離れ、パリに移り住んだのは、1979年のことである。以来、死去するまでの10年間を、異郷で過ごした。パリに住みながらも、望むときにはいつでもユーゴスラヴィアを訪れることができたキシュの「亡命」は、公的な人生が完全に奪われ、母国を離れざるをえなかったミラン・クンデラに代表されるような、いわゆる「亡命作家」のそれとは大きく異なる。キシュは自らの行動を「ジョイス的亡命」と名づけた。この言葉は、オウィディウス、ダンテからジョイスまで、幾多の偉大な文学者が行ってきた「文学のための彷徨」を、自分もまた選んだのだというキシュの自負を表わしている。キシュは1983年の作品集出版に際し、「出生証明書——短い自伝——」というエッセイを書き加えて、それまで触れることを避けていた自らの伝記的な事実について、次のように語りはじめた。

僕の父は西ハンガリーに生まれ、ヴィラーグ⁽¹⁾なる人物、ジョイス氏のおかげで、かの名高いレオポルド・ブルームとなった男の生まれ故郷にある商業学校で学んだ。祖父がまだ年端もいかぬ息子にハンガリー人の姓を名乗らせたのは、融和への希望はもちろん、フランツ・ヨーゼフ一世の自由主義政策にもよるのだと思う。けれども、家族の年代記の詳細はほとんどが永遠にわからないままとなる。1944年、父は、多くの親戚と同じように、アウシュヴィッツに連れ去られた。そして、ほとんど誰もそこから戻ってくることはなかった。

母方の祖先には、伝説上のモンテネグロの英雄が一人いる。50歳になって読み書きを覚え、剣の栄光にペンの栄光を加えた人だ。それに「アマゾネス」も。彼女は、復讐のために、トルコの暴君の首をかき切った。僕が表わしている民族誌的特異性は、だから、僕とともに消えゆくだろう。

4歳のころ（1939年）、ハンガリーで反ユダヤ法が公布されようとしていたとき、両親はノヴィサドの聖母被昇天教会で僕に正教の洗礼を受けさせた。それが僕の命を救った。13歳まで父の生まれ故郷のハンガリーで過ごした。ノヴィサドの大虐殺の後、1942年に家族でそこに逃げてきたのだ。富農のもとで使用人として働き、学校では教理問答とカトリックの聖書の勉強に取り組んだ。フロイトが *Heimlichkeit* と名づけた「不安を生み出す差異」は初歩の文学においても形而上学においても僕を刺激した。初めて詩を書いたのは9歳のとき。ハンガリー語でだった。一つは空腹

1 virág はハンガリー語で bloom（花、開花）の意味。『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルーム Leopold Bloom は、ハンガリー系ユダヤ人とされる。キシュの作品では、『若き日の哀しみ』の主人公アンディの友人の一人であるジプシーの少年にヴィラーグの名が用いられている。

についての詩。もう一つは愛についての詩で、すばらしい出来だった。⁽²⁾

ジョイスの『ユリシーズ』を示唆する冒頭は、いかにも世界の文学に精通したキシュらしい内容であると同時に、自ら選択した「ジョイス的亡命」と、そして、故郷にたどりつくまで20年あまり放浪を続けたオデュッセウスの運命が示唆されている。さらに、ここで着目したいのは *Heimlichkeit* というドイツ語である。これは、フロイトの「不気味なもの」*Das Unheimliche* において検討されている言葉である。この小論において、フロイトは、「不気味なもの」がどのようなものであるかを明らかにしようとしている。フロイトは、まず、*heimlich* (なじみぶかい、ひそかな) という語の意味する領域が、反意語であるはずの *unheimlich* (不気味な) という語の意味する領域に重なることを、ラテン語、ギリシア語、英語、フランス語といったさまざまな言語、さらに、さまざまなドイツ語の辞書を参照して検討する。フロイトの引用によれば、グリム兄弟の辞書では、*heimlich* は、「故郷をしのばせるもの」から「他人の目に隠された秘密のもの」という概念に展開するとされる。さらに、「隠されていて危険なもの」という意味が発生することが指摘され、最後に、「*heimlich* は通常は *unheimlich* がそなえる意味を担うにいたる」と明記される。こうして、*heimlich* という語の両義性を確認したうえで、フロイトは、E.T.A. ホフマンの小説『砂男』を例にとり、「不気味なもの」がどのような心理的緊張から生み出される観念であるかを検証し、「もっとも親しいものですら「不気味なもの」の感情をかきたて、謎めいた恐怖をそそるかたちで主体に回帰しとりつくこと」⁽³⁾ を示している。また、文学においては、「不気味さ」をなじみぶかい現実のただなかで読者に体験させることが可能なばかりではなく、「不気味なもの」を不気味にではなく読者に提示することも可能である、と主張する。キシュが、「不安を生み出す差異」の同義語として、*Heimlichkeit* というフロイトの概念をあえて借用したのは、この語がもつ両義性、すなわち、自己が慣れ親しんでいるものであると同時に、他者に対しては隠されていて危険とみなされうるもの、さらにはそれが自己にとっても不安をかきたたせるものという概念が、自らの感覚にぴたりと一致していたからだけではない。*heimlich/unheimlich* という心理的な問題を文学の観点から論じたフロイトの姿勢が、「不安を生み出す差異」を文学的な主題として追求していくというキシュ自身の課題に一致していたからである⁽⁴⁾。キシュは、この感覚を元に、それを文学としてどのように提示するかを考えながら、さまざまな形式の作品を生み出していくが、まずはその源となった伝記的な事実について確認しておく。

キシュの人生は、幼少の頃より、移動の連続であった。1935年、ハンガリー系ユダヤ人の父エドゥアルド・キシュとモンテネグロ人の母ミリツァ・ドラギチェヴィチの長男として、

2 Danilo Kiš, “Izvod iz knjige rođenih (kratka autobiografija),” in Kiš, *Mansarda*, Sabrana Dela Danila Kiša, ed. Mirjana Miočinović (Beograd: BIGZ, 1995), p. 112.

3 P. コフマン編 (佐々木孝次監訳) 『フロイト&ラカン事典』弘文堂、1997年、327頁。

4 キシュは、「出生証明書」の4年後に発表したインタビュー形式の伝記「人生、文学」でも、この言葉について語っている。ここで、キシュは、両義的な出自、ユダヤ性からもたらされる「不安を生み出す差異」、戦時中の不幸な子ども時代がなければ、自分は作家になっていなかっただろうと振り返っている。Danilo Kiš, “Život, literatura,” in Kiš, *Život, literatura*, Sabrana Dela Danila Kiša, ed. Mirjana Miočinović (Beograd: BIGZ, 1995), p. 12.

ヴォイヴォディナ北部の町スポティツァ Subotica（ハンガリー名はサバトカ Szabadka）で、生を受けたが、二年後にはヴォイヴォディナの州都ノヴィサド Novi Sad（ハンガリー名はウーイヴィデーク Újvidék）へ引っ越している。スポティツァの記憶はないにもかかわらず、キシユがこの町に生まれたことを重く見ていたのは、第一に、文化的にも地政学的にも「ユーゴスラヴィアとハンガリーの国境」の町であること⁽⁵⁾、そして、第二に、父と母が知り合った町であるという事実のゆえであった。モンテネグロの古都ツェティニェに生まれ育ち、それまで故郷から遠く離れることのなかったミリツァが、偶然にも、セルビアの北部の田舎町にいたのは、結婚した姉妹を訪ねてきたためであった。15歳の年の差、言語の壁（エドゥアルドはハンガリー語を母語とし、ドイツ語、セルビア・クロアチア語も話せたが、ミリツァは母語であるセルビア・クロアチア語しか話せなかった）から、夫婦間には当初から普通ではない距離があったものと思われる⁽⁶⁾。ミリツァは、1932年、長女ダニツァを出産しており、ダニロは第二子である。その出産を担当した医師は両親の友人のユダヤ人で、出生証明書はスポティツァのシナゴークで発行された。

キシユの子供時代は、悲しみと苦しみに満ちている。その子供にとって、唯一、幸せな記憶の残る町が、ノヴィサドである。たとえ、ごく一部の記憶であるにせよ。「香り、味、色。クリの花の香り、花瓶に生けられたバラの香り、カミツレ茶の香り、ミシンの潤滑油の匂い、父のタバコの匂い、母の首筋のコロンの匂い・・・」⁽⁷⁾。キシユはこの町を、鋭敏な五感のすべてで記憶している。個人的な、内向的な記憶だけではない。セルビア人小学校に入学して、束の間、送ることができた「子供らしい」生活の思い出もある。とはいえ、「ごく一部の記憶」と書いたように、ノヴィサドは安住の地ではなかった。生の町であるとともに死の町でもあった。ユダヤ人迫害の嵐が襲ってくる。キシユの生命を現実には救ったのは、この町の聖母被昇天教会で受けた洗礼であった。その一方で、41年4月に、ドイツ軍がユーゴスラヴィアに侵攻し、ヴォイヴォディナがハンガリーに併合されると、ユダヤ人襲撃事件が相次ぐようになり、キシユの家族は徐々に緊張感を募らせながら、ノヴィサド市内を転々と移り住んでいた。そして、ついに、1942年1月に、ハンガリーのファシスト政党、矢十字党の主導のもと、数千人のセルビア人、ユダヤ人が虐殺されるという事件が起こる。「冷え込んだ日々」⁽⁸⁾と呼ばれるこの事件は、一家に深い傷を残すことになった。集団虐殺の現場に連行された父エドゥアルドは、運よく難を逃れたものの、あまりに残酷な光景を目の当たりにして、精神の

5 Ibid., p. 13.

6 キシユは、両親が結婚前に会ったのは「一度きりだったかもしれない」と思い切った推測をしている。Danilo Kiš, “Život, literatura (fragmenti),” in Kiš, *Skladište*, Sabrana Dela Danila Kiša, ed. Mirjana Miočinović (Beograd: BIGZ, 1995), p. 325.

7 Kiš, “Život, literatura,” p. 13.

8 この事件が「冷え込んだ日々」と呼ばれるようになった経緯について、キシユは次のように説明している。「1942年の冬は、戦争中でもっとも寒い冬のひとつでした。温度計は、摂氏マイナス30度を下回りました。そこから、あの虐殺は、あの地域のユダヤ人とセルビア人の住民に、『冷え込んだ日々』と呼ばれるようになったのです。この気象学的な隠喩を使うことで、本当の、より適切な言葉の組み合わせを使わずに済むように。『血塗られた日々』という言葉を。」Kiš, “Život, literatura (fragmenti),” p. 326.

均衡を失ってしまう。息子ダニロもまた、同級生の死体が道端に放置されているのを目撃することになる。このとき、キシュの子供時代は終わった。

「冷え込んだ日々」の事件からまもなく、家族は、父の生まれ故郷である西ハンガリーのザラ州の農村ケルカバラバーシュへと避難する。この土地は、キシュに、辛い記憶だけを残している。精神を病んだ父は、親戚とのいさかいが絶えず、しばしば行方をくらませ、家に帰ってこなかった。家族は貧しい生活を強いられ、ダニロは牛飼いの手伝いをして家計を助けた。その父でさえ、ほとんどすべての親戚と同様に、ナチスの魔手を逃れることはできなかった。ザラ州の中心都市ザラエゲルセグのゲットーに収監された後、1944年にはアウシュヴィッツに移送されて、戻らぬ人となる。父親の不在、しかも、戦時下の物心両面での窮乏生活における一家の柱の不在、それが、のちのキシュの文学にとって強迫観念的な主題となるのは、何よりもまず、現実の生活がどれほど茫漠として暗く、冷たい不安を、人生に直面しはじめたばかりの子供の心に植えつけたかを示している。さらに、ユダヤ人であるがゆえに向けられる冷たい眼差し。カトリックの小学校で教えこまれる教理問答、気乗りのしない勉強。少数ながら、大戦後に収容所から生還した父の親族もいるが、父エドワードは一族の異端者であって、親族が、残された妻子に親身になることはなかった。ハンガリー語があまり話せなかった母を気遣い、貧乏ゆえの屈辱に苛まれ、同級生との摩擦の絶えない日々が続く。時代は少年の心を確実に蝕んでいた。のちに、フランスの雑誌『アクチュエル』のアンケート「もっとも美しい場所、もっとも醜い場所」への回答として、1983年ごろに書かれたという断片「AとB」で、キシュが、後者に、ケルカバラバーシュの家を選んでいるのは、少年の日々の苦い回想の働きである⁽⁹⁾。

1947年、国際赤十字を通じて妹一家を捜していた母方の伯父リスト・ドラギチェヴィチ⁽¹⁰⁾に呼び寄せられ、母子三人はケルカバラバーシュからツェティニェへと移り住む。しかし、ここでも、キシュは、セルビア・クロアチア語をうまく話せないために、同級生にからかわれ、衝突を繰り返した。1947年か48年ごろに、はじめてベオグラードに滞在する⁽¹¹⁾。駅のそばのホテルにこもりきりだったらしいが、都会生活の記憶は、ツェティニェに戻ってか

9 Danilo Kiš, “A i B,” in Kiš, *Skladište*, pp. 299–302. このとき、「もっとも美しい場所」に選ばれたのは、モンテネグロのアドリア海に面した町、コトルである。中世のアドリア海文化を残す町は世界遺産にも指定されているが、キシュにとって、コトルは単に美しい町ではなく、楽園のイメージを備えていたことは、自伝的三部作の一つ『砂時計』の第62節から明らかである。山崎は、男性性と女性性の混合から生まれるキシュの抒情性が、このテキストに見られることを、『死者の百科事典』との関連において指摘している。Јамасаки Кајоко, “Данило Киш и јапански читаоци,” Предраг Палавестра, ред., *Споменница Данила Киша* (Београд: Српска академија наука и уметности, 2005), стр. 352.

10 Risto J. Dragičević (1901–1980) モンテネグロの歴史研究家で、ツェティニェの国立博物館の司書を務めた。ベオグラード大学進学の後、ポーランド政府奨学金を得てクラクフのヤギエヴォ大学に短期留学している。

11 キシュによると、ベオグラードに滞在したのは一年間とのこと。Danilo Kiš, “Gorki talog iskustva,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, ed. Mirjana Miočinović (Beograd: BIGZ, 1991), p. 11. ただし、キシュの公式ホームページに掲載されている年表には、47年から48年の間にベオグラードに滞在したという記述はない。Danilo Kis Home Page, “Podmuklo dejstvo biografije” [<http://www.kis.org.yu/web/Acitav/B/index.htm>]. 以下、URLは2007年8月30日現在有効。

らも薄れることはなかった。母のミリツァは3、4年におよぶ闘病生活の末、51年に亡くなり、少年の心に暗い影を落とし続けることになる。唯一の救いは、伯父が著名なニェゴシュ研究家であり⁽¹²⁾、多くの書物を所蔵していたことであった。雨が何ヶ月も降り続くような地方で、他にすることもなく、キシユは伯父の「図書館」にこもり、夢中になって辞書や百科事典のページをめくった。キシユは、この体験が、自分の文学の「ボードレールのな夢想の源」となったと語っている⁽¹³⁾。

常に周囲との差異を意識させられる孤独な若者にとって、気持ちや、差異が目立つ小都市から、差異が埋没する大都市へと向かうのは、ごく普通のことであろう。キシユは、1954年、ベオグラード大学比較文学科に入学。在学時から、詩、エッセイなどを盛んに寄稿し、1957年から60年までは、雑誌『展望』*Vidici*の編集者を務めている。1958年に大学を卒業し、修士課程に進学。1959年には、はじめて国境を越える。イタリアとユーゴスラヴィアの国境セジャーナ（現在はスロヴェニア領）を電車で通過して、パリへと向かった。小説家としての活動を開始したのも、この年のことである。最初の作品は『屋根裏部屋』。都会に出てきた田舎の若者の懊悩を主題とする。1960年に、「ロシアとフランスの象徴主義におけるいくつかの特徴について」と題した論文を提出し、修士課程を修了。1961年3月から一年間、兵役につき、ピレチャ（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）とデルニツェ（クロアチア）に派遣されている。兵役後の1962年に、比較文学科の同級生であったミリアナ・ミオチノヴィチと結婚。フランスに滞在して、セルビア・クロアチア語学・文学の講師をしながら、小説、エッセイを執筆する。『庭、灰』は、1962年から64年まで勤務したストラスブール大学時代に、『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』は1973年から76年まで勤務したボルドー大学時代に、それぞれ執筆されている。

パリへの「ジョイス的亡命」は1979年である。引き金となったのは、スターリン時代の粛清を扱った短篇小説集『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』（1976）。ユーゴスラヴィアの文壇は、この作品をめぐる、賞賛をおくる側と批判をする側に分かれ、激しい議論の応酬が複数の文芸誌上で交わされた。2年後、キシユが批判への反論である『解剖学講義』を出版すると、論争はさらに激化して、ついにはキシユと、キシユの親友であり最も熱心な擁護者でもあったプレドラグ・マトヴェイエヴィチが訴えられ、精神的苦痛に対する慰謝料のみならず、最低10年間の公職追放を請求される事態に至った。失望と閉塞感が深まったキシユは、騒動についてそれ以上発言しようとはしなかったが、ベオグラードを去ることは、本人にとってもう避けられない事態になっていたようである⁽¹⁴⁾。マトヴェイエヴィチは、パリに住む

12 ペタル・ペトロヴィチ＝ニェゴシュ（1813–1851）はモンテネグロの君主、主教。旧ユーゴスラヴィアでもっとも有名な詩人の一人であり、邦訳に、ペタル二世ペトロビッチ＝ニェゴシュ（田中一生、山崎洋訳）『山の花環』彩流社、2003年がある。

13 1953年4月、雑誌『青年運動』*Pokret mladih*に韻文詩「さようなら、お母さん」が初めて掲載されたとき、キシユは18歳だった。同年、4篇の詩と2篇のエッセイが掲載されている。

14 マトヴェイエヴィチは、「もしあの事件が起こらず、何でもするねたみ深い三文文士たちの陰謀のはじめの段階で、彼が孤立していなければ、パリに向けて旅立つこともなかっただろう」として、『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』をめぐる論争がキシユをパリへの「亡命」に向かわせたとはっきり主張している。Predrag Matvejevič, *Le monde «ex»* (Paris: Fayard, 1996), p. 147; プレドラグ・マトヴェイエヴィチ（土屋良二訳）『旧東欧世界：祖国を失った一市民の告白』未来社、2000年、

ことを決めたキシュを非難し、ユーゴスラヴィアに残るよう懇願したことを告白しながら、

『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』とともに彼の人生における何か本質的なもの、今日では——あまりにも型通りにはしたくないが——無視できないものが壊れた。苦痛に満ちた経験から悪性の病気が生じるというのが正しいかどうか、僕にはわからない。でも、おそらくそういうことだろう。⁽¹⁵⁾

と哀悼の気持ちをこめて語っている。キシュの決断を批判したマトヴェイエヴィチ自身、その10年後に自らも祖国を離れることになるろうとは思ってもよらなかったにちがいない⁽¹⁶⁾。しかし、そのときには、もう、キシュはこの世にいなかった。キシュの死を悼むマトヴェイエヴィチのためらいがちな語り口を聞いていると、「宿命」という言葉が思い浮かぶ。軽々しく用いるべきではない言葉が避けようもなく脳裏をよぎるのは、キシュその人が、「宿命」に、不思議な偶然にこだわり続けた作家だったからであろうか⁽¹⁷⁾。キシュを「亡命」へと追い立てることになった短篇集『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』もまた、作者が、*La part de Dieu ou la part de Diable*（神の取り分か悪魔の取り分）と呼ぶ、「宿命」的な作品であった⁽¹⁸⁾。

他方、この「亡命」には、キシュがこれまでも実践してきた「さまよえるユダヤ人」としての生き方の探求があった。キシュは1985年のインタビューで、「もし、自由意志ではどうすることもできない避けられない不思議というものがあるのなら、それは『さまよえるユダヤ人』である」⁽¹⁹⁾とし、どこにいても、いつの時代でも、この差異の「しるし」が消えることはないと述べている。たとえば、ユダヤの出自という heimlich な差異、このような消え去ることのない差異の根拠を文学的なテーマに据えて限界まで追求すること、これが常に

137頁。ただし、キシュのパリへの「亡命」という選択には、ボルドー時代のキシュの学生、パスカル・デルペシュとの出会いと内的な葛藤も考慮に入れる必要がある。1981年にミオチノヴィチと離婚し、デルペシュと結婚。その後、デルペシュはキシュの作品を次々にフランス語に訳した。しかし、結婚後も、キシュは質素な仕事部屋に一人で住んでいたという。

15 Matvejevitch, *Le monde «ex»*, p. 147; マトヴェイエヴィチ『旧東欧世界：祖国を失った一市民の告白』137頁。

16 マトヴェイエヴィチが祖国を離れたのは1991年のことである。公開書簡集『アジュールと亡命のあいだ：ロシア書簡』は1995年にパリで出版された。マトヴェイエヴィチの「亡命」については、阿部賢一「プレドラグ・マトヴェイエヴィチの『書簡集』について」『現代文芸研究のフロンティア (VII)』北海道大学スラブ研究センター、2005年、170–183頁に詳しい。

17 キシュは、「作家の運命においては、偶然のものは何もない」と語っている。Kiš, “Život, literatura,” p. 13.

18 セルビア・クロアチア語講師として滞在していたボルドーで、短篇「ボリス・ダヴィドヴィチの墓」を書きあげたキシュは、偶然、街の本屋で、中世フランスの異端審問の記録に関する書物を見つける。不幸な事件の主人公の名前は、バルフ・ダヴィド・ノイマン Baruh David Nojman。キシュの主人公ボリス・ダヴィドヴィチ・ノフスキー Boris Davidović Novski とまったく同じイニシャルであった。そればかりでなく、一方は1330年、他方は1930年、600年の時を経ているものの、公権力に身柄を拘束された日付も同じであったという。キシュはこの記録をセルビア・クロアチア語に翻訳し、「犬と書物」という題をつけて、短篇集『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』に収録した。Danilo Kiš, “La part de Dieu,” in Kiš, *Skladište*, pp. 149–153.

19 Danilo Kiš, “Imenovati znači stvoriti,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, p. 144.

キシユの課題でありつづけた。キシユの作品に登場する人物は、差異に対する鋭い感覚を有していた人々である。『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』の主人公たちは、ユダヤの出自をもちながら、その差異が消去しようと信じて、共産主義へと身を投じた人たちであったし、キシユの最後の短篇集『死者の百科事典』（1983年）におさめられた「魔術師シモン」は、キリスト教の異端であるグノーシス派を下敷きにしている。同じく『死者の百科事典』に収められた「赤いレーニン切手」の主人公メンデル・オシポヴィチの原型は、ユダヤ人の家庭に生まれ、完璧なロシア語を話す母親と、言語ではないようなユダヤの言葉を話す父親とのあいだで、言語にたいする意識を研ぎ澄まし、詩作に向かったオシップ・マンデリシュタムである。キシユが目指したのは、文学作品を書くことを通して差異のあり方を限界まで追求し、その先に普遍を見出すことであった。

このような探求が、もっともよく表われている作品の一つに、未完成の短篇「アパトリッド」がある⁽²⁰⁾。オーストリア・ハンガリー帝国出身の劇作家エデン・フォン・ホルヴァート（1901-38）の生涯を題材にしたドキュメント風の作品である。作者キシユは、この短篇の主人公に、多かれ少なかれ、自己を投影していた。すなわち、この主人公に、「中央ヨーロッパ」の作家というアイデンティティを読み取っていた。その意味で、この短篇は、未完ながら、重要な作品である。本論文では、この作品を手がかりに、作家ダニロ・キシユの「亡命」の問題を、限界の探求としての「中央ヨーロッパ」の概念に着目して、考察したい。

1. 「アパトリッド」の概要

1-1. 創作の背景

「アパトリッド」の執筆は、短篇集『死者の百科事典』に収録する予定でなされていた⁽²¹⁾。未完のままに終わった物語をまとめたのは、キシユの最初の伴侶ミアナ・ミオチノヴィチである。彼女は、遺稿のなかから、タイプで打たれた47枚の原稿を見つけ、それらをまず分類した。こうして、ページ番号がタイプ打ちされ、一息で行なわれたらしい校正が書き込まれている17枚、ページ番号がない代わりに1から15まで番号づけされた断片、これら二種類のヴァリエーションと思われる断片の三群に分けられた。現在の26節立ては、第一ヴァージョンをもとに、第二ヴァージョンからストーリーの順番を推測して再構成されたものである（第三ヴァージョンに分類された断片は、再構成には反映されていない）。第一ヴァージョンの一枚には、「APATRID / ČOVEK BEZ DOMOVINE（アパトリッド／祖国のない男）」という表題が、そして、その下の括弧のなかに、DUH JE NAŠA DOMOVINA（我々の祖国は心である）というエピグラフめいた文章が記されているという。現在の「アパトリッド」という表題は、この三つの句の中から、ミオチノヴィチが選んだものである。なお、アパトリッド Apatrid というセルビア・クロアチア語は、祖国のない人を意味する、ギリシア

20 Danilo Kiš, "Apatrid," in Kiš, *Skladište*, pp. 203-219.

21 『死者の百科事典』という表題で出版された短篇集は、七度にわたって構想が練られた。本短篇は、「エデン・フォン・ホルヴァート」のタイトルで、最初の二度の構想（二度とも1980年と推定される）に見られる。ちなみに、最初の構想では、短篇集の表題は、「寓話集」、次には「東西詩集」であった。「死者の百科事典」が表題に選択されるようになったのは、三度目以降である。

語源のフランス語 *apatride* に由来する語であろう。作中では主人公の別名として用いられてもいる。

ミオチノヴィチによれば、キシュがはじめてホルヴァートの戯曲を目にしたのは1970年のことであり、以来、「小説にもってこいの題材」として、構想を暖めていたそうである⁽²²⁾。キシュの遺稿のなかからは、ページ番号が付されていない紙に書かれた「アパトリッド」に関する覚書も見つかっている⁽²³⁾。そこには次のように記されていた。

僕は、何年も「アパトリッド」あるいは「故国のない男」の物語に取り憑かれていた。ある雑誌の短い記事で、彼の人生と悲劇的な最期について知った、そのときから。初めは、エッセイか研究ノートで書くつもりだった。だが、何ページか書いたとき、僕は、自分自身の心情を主人公と混同していることに気づいた。(中略) そういうわけで、そのまま放ったらかしになっていた。そんなある日、僕のアパトリッドを取り上げた博士論文に(偶然に?)出くわした⁽²⁴⁾。そのとたん、彼の人物像が生き生きと甦ってきた。僕の主人公はその論文でどのように扱われていたか? 論文には、情報、日付、事実など、役に立つことが無数に書いてあったけれど、僕の想像上の物語はぶち壊されていた。僕の主人公の生と死を覆っている神秘、神秘めいた雰囲気、突如として雲散霧消してしまったのだ。クロスワードパズルの四角い網の目のような、あけすけな事実構成のなかに、僕は自分のやり方で、言葉を書き込んでいくことにした。⁽²⁵⁾

こうして、パリで終わりを迎えた「中央ヨーロッパ人の運命」⁽²⁶⁾ という主題に、キシュが再度取り組みはじめたのは、1979年、パリへの「自由亡命」の直後のことである。一度は断念した作品を書くにあたって、キシュは、客観的事実によってのみ構成されるエッセイあるいは研究ノートではなく、客観的事実とフィクションを織り交ぜた短篇小説という様式を選んだ。そのうえで、キシュは「自分自身の心情」と「主人公」のあいだに適切な距離を設けるため、主人公に別の名をつける。ハンガリー語で「クロアチアの」を意味するホルヴァート *Horvát* の代わりに、同じくハンガリー語で「ドイツの」を意味するネーメト *Német* を充

22 Danilo Kiš, “Beleške,” in Kiš, *Skladište*, p. 365. このときキシュが手にしていたのは、ガリマール社の *Du monde entier* 版とのこと。Ödön von Horváth, *LA NUIT ITALIENNE suivie de Cent cinquante marks et de Don Juan revient de guerre*, trans. Renée Saurel (Paris: Gallimard, 1967).

23 この断片は『死者の百科事典』の「ポスト・スクリプトウム」に収録するために書かれたのではないかとミオチノヴィチは推測している。Kiš, “Beleške,” p. 367.

24 この博士論文は、Jean-Claude François, *Histoire et fiction dans le théâtre d’Ödön von Horváth: 1901–1938* (Grenoble: Presses Universitaires de Grenoble, 1978) であるという。Kiš, “Beleške,” p. 366.

25 Kiš, “Beleške,” p. 366.

26 ミオチノヴィチが「アパトリッド」について用いている表現。Kiš, “Beleške,” p. 366。「中央ヨーロッパ」の語そのものはこの短篇では一度も用いられていない。デリッチもまた、「アパトリッド」についてこの言葉を用いている。デリッチは、さらに「キシュはアパトリッドに極めて親近感を抱いていた。おそらくは、1979年に「ジョイス的亡命」を自ら選択してから強まった、さまよえるユダヤ人の呪いを受けているという気持ちに、よく合致したのだろう」と述べている。Јован Делић, *Кроз прозу Данила Киша* (Београд: БИГЗ, 1997), стр. 450–451.

てたのは、不本意ながらも創作を後押しすることとなった論文へのアイロニーである⁽²⁷⁾。こうして、ホルヴァートの伝記的事実を取り込みながらも、文学的人物としてのエゴン・フォン・ネーメト Egon von Német が作り出された。キシュがこれまでも一貫して追究してきた文学的課題、「現実」と「虚構」の狭間の世界を実現するために。

1-2. 「エデン・フォン・ホルヴァート」

エデン・フォン・ホルヴァートは、「アパトリッド」の主人公ともいべき人物で、1901年にアドリア海に面する港町フィウメ（現在、クロアチアのリエカ）で生まれ、38年、亡命先のパリで不慮の死を遂げた劇作家である⁽²⁸⁾。父は、オーストリア・ハンガリー帝国の外交官でハンガリー系、母はドイツ系である。一家は、父の赴任先にしたがって、ベオグラード、ブダペシュト、ミュンヘン、プレスブルク（現在スロヴァキアの首都ブラチスラヴァ）を転々とする。ミュンヘン大学で演劇を学び、1926年からベルリンに住む。しかし、1933年にナチスが政権を獲得すると、ホルヴァートの作品は上演禁止となり、ナチス突撃隊に自宅搜索をされたこともあって、ウィーンへの亡命を決意する。しかし、1938年3月ドイツがオーストリアを併合すると、ホルヴァートはさらなる亡命の必要に迫られることになる。二度と戻ることがないと予感していたのか、ブダペシュトの父のもとでしばらく過ごした後、ユーゴスラヴィア、イタリア、スイス、アムステルダムを経て、パリに到着したのは5月末のことであった。そして、「アパトリッド」の第1節は、次のような一文で始まる。

『彼がパリに到着したのは、1938年5月28日だった。』⁽²⁹⁾

引用符が示すように、1938年5月28日、パリに到着したのは、現実の人物、すなわちホルヴァートである⁽³⁰⁾。引用文と次の文章の間には、一行分の空白が置かれているが、それは、この一文の「彼」を浮き上らせるためであり、作者の意識からすれば、「彼」は虚構の主人公ネー

27 論文の筆者フランソワは、冒頭で、ホルヴァートの姓について、「クロアチアに隣接している地域のハンガリー人のあいだでよくある名前」であるとし、「同様に、ドイツの近くに住むハンガリー人はネーメトと名乗りえた」と付け加えている。François, *Histoire et fiction*, p. 11. また、この論文では、ホルヴァートが1933年に書いた戯曲『行ったり来たり』の登場人物を表わす語として、“apatride”という言葉が用いられている。François, *Histoire et fiction*, p. 46.

28 ホルヴァートの生涯については、エデン・V・ホルヴァート（岩淵達也他訳）『ホルヴァート著作集』全2巻、三修社、1987年の第1巻の末尾に詳細な年譜が付されているので参照されたい。

29 Kiš, “Apatrid,” p. 203.

30 『ホルヴァート著作集』（三修社）の年表では、ホルヴァートがパリに到着した日付が3月28日と記載されているが、ドイツ語のホルヴァート全集に付された年表では5月28日となっている。Ödön von Horváth, “Daten,” in Horváth, *Gesammelte Werke*, vol. 8 (Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1972), p. 742. 『著作集』の年譜のもとになったと考えられるのは、越部暹編「ホルヴァート・クロニクル（年譜）」『新劇』1973年6月号、106-109頁であるが、ここでは、ホルヴァートのパリ到着は5月となっている。引用符でくくられた文章は、第2節でも、冒頭に配置されている。この短篇が未完の作品であることを考慮すると、作者は、引用符のついた文章、空白、本文という形式をすべての節で適用するつもりであったのかもしれないが、いまとなっては、推測の域を出ない。

メトではなく、現実のホルヴァートであろう。ホルヴァートがパリにやって来た日付がわざわざ記載されているのは、パリ到着からわずか4日後の6月1日に、「運命の日」が到来するからである。第1節には二つの段落があり、引用文の次には、不吉な予感の高まりと、「故国のない紳士」の陰鬱な心情が描かれている。

引用符の文章は、第14節にも見られる。これは、1934年に行なわれたインタビューからの抜粋とされている。

『僕は、古きよきオーストリア・ハンガリー帝国の、典型的な混血児だ。ハンガリー人であると同時に、クロアチア人、スロヴァキア人、ドイツ人、チェコ人でもある。』⁽³¹⁾

この内容は、1929年にドイツの雑誌『横断』*Der Querschnitt*に掲載されたホルヴァートの自伝的エッセイ「フィウメ、ベオグラード、ブダペシュト、プレスブルグ、ウィーン、ミュンヘン」の文章に酷似している。すなわち、「僕は、古きオーストリア・ハンガリーの、典型的な混血児だ。ハンガリー人、クロアチア人、ドイツ人、チェコ人の。」⁽³²⁾いま、このような「混血児」を中央ヨーロッパ人と呼ぶなら、ホルヴァートは（そして、ネーメトは）、限界に立って、差異を越えようとする、典型的な中央ヨーロッパ人である。ホルヴァートとネーメトの平行関係は、次々と現れてくる。

詩人として名をなしたこと（第6節）。外交官の父がフィウメに赴任していたときに生まれたこと（第7節）。1905年、ベオグラードで家族写真を撮ったこと、プレスブルグに家族で住んでいたこと（第10節）⁽³³⁾。住んでいた土地を去り、ブダペシュトで、年老いた、病気の父に会ったあと、ユーゴスラヴィア、イタリアを経てアムステルダムにおもむいたこと（第16節）。アムステルダムで、過去に自分の本を出版してくれたファン・デル・ランゲ氏と会い、作品の出版の相談をしたこと（第17-18節）。ファン・デル・ランゲ社は、1937年、発表の場を失っていたホルヴァートのために『神なき青春』を刊行した出版社である。このように、「アパトリッド」の主人公ネーメトは、ホルヴァートの出自とその後の人生をなぞるようにして、パリにたどり着いた。

1-3.「エゴン・フォン・ネーメト」

エゴン・フォン・ネーメトは文学的人物として構築された主人公である。たとえば、第2

31 Kiš, “Apatrid,” p. 211.

32 Ödön von Horváth, “Fiume, Belgrad, Budapest, Preßburg, Wien, München,” in Horváth, *Gesammelte Werke*, vol. 5, p. 9. この箇所は先述の博士論文でもフランス語に訳した形で引用されているが、「アパトリッド」同様、原文にはない「同時に」という言葉が付加されている。「アパトリッド」の文章は、この博士論文からの引用であろう。François, *Histoire et fiction*, p. 11. 1932年4月5日、クライスト賞授与を記念して行なわれたホルヴァートのインタビューにも非常によく似た内容が見られる。「私の名前は、純粋なハンガリー名です。私の中には、ハンガリーの血が流れています。チェコの血とクロアチアの血も。私は、典型的なオーストリア・ハンガリーの人間です。」なお、ホルヴァートの全集に収録されているインタビューはこの一度だけである。Ödön von Horváth, “Interview,” in Horváth, *Gesammelte Werke*, vol. 1, p. 7.

33 ホルヴァートの一家も1902年から1908年まで、ベオグラードに住んでいる。

節では、主人公が目撃したエレベーター事故についての情景が語られ、迷信じみた恐怖症におびえる姿が示される。1938年、アムステルダムでホルヴァートと会ったクラウス・マンによれば、ホルヴァートは、原因不明の恐怖症に苛まれていたという⁽³⁴⁾。キシユは、マンの証言から、エレベーター事故についての挿話を生み出したのだろう。これは、彼をパリで待っている「宿命」の予兆という意味だけではなく⁽³⁵⁾、何かへの病的な恐怖症が、キシユの文学的人物の重要な特徴の一つだからである。

さらに、さきほどの第14節からの引用文の続きは、ホルヴァートの記録にはみられないものである。

『もし、先祖をたどって、血統の分析——今日、ナショナリストのあいだで大流行している学問——を行なったなら、川床の層のように、ワラキア、アルメニア、もしかしたら、ジブシー、ユダヤ人の血統の痕跡が見つかるだろう。僕には、血液のスペクトル分析学の知識はないが、この学問は、信頼性に致命的な疑問があるし、危険で、非人道的でもある。とくに、今の時代、僕たちの住む地域では。ここでは、郷土と血統の物騒な理論は、疑心と憎悪を生みだすだけで、「血統と出自のスペクトル分析学」がもっとも好んで用いるのは、ナイフと拳銃という見世物的な、原始的な方法である。僕は生まれつきのバイリングルで、18歳までハンガリー語とドイツ語の両方で書いていた。ハンガリーの詩人の詩集を翻訳してみて、ドイツ語のほうが自分に近いことを知った。僕は、ドイツの作家なんです。僕の祖国は、世界です。』⁽³⁶⁾

これを受けて、第15章では、「出自の理論」が人種の問題だけではなく、社会的な問題であることが示されるが、いまは、この愚かしい「理論」を「スペクトル分析学」と名づける諧謔に、キシユらしい工夫を認めておきたい。

作品の展開にも、文学的な工夫が凝らされている。『砂時計』において、主人公の名前が第16節まで明らかにされなかったように、「アパトリッド」でも、主人公を指すのに「故国のない紳士」、「故国のない男」という呼称がとられており、名前は第10節までわからない。主人公の父親の名前が第7節で明かされるので、読者には、まずは推測の形で提示されることになる⁽³⁷⁾。『砂時計』との類似は内容面でもディテールの面でも顕著である。『砂時計』の読者は、「アパトリッド」の第3節に登場する「大理石のナイトテーブル」、第4節でのさまざまな人物の観察を書き連ねる主人公の姿、第5節での暴力的な事態に対する主人公の嫌悪感、そして、第22節で二等車に乗る主人公の姿から、『砂時計』の主人公 E. S. の姿を思い起こすはずである。

34 クラウス・マンの証言による。越部「ホルヴァート・クロニクル（年譜）」109頁。

35 このエレベーターは「古風なフランス式」であり、死者の霊を乗せるカローンの舟に喩えられている。Kiš, “Apatrid,” p. 205.

36 Kiš, “Apatrid,” p. 211. ホルヴァートの自伝的エッセイ「フィウメ、ベオグラード、ブダペシュト、プレスブルグ、ウィーン、ミュンヘン」には、「僕の祖国は、民衆だ」という言葉がみられる。Horváth, “Fiume, Belgrad, Budapest,” p. 9. これらの言葉は、第一章でみた「我々の祖国は心だ」というエピグラフめいた一文を想起させる。

37 主人公の名前の提示に関するこの方法は、『詩篇 44』の場合に一致する。

「アパトリッド」の主人公が、実在した人物「エデン・フォン・ホルヴァート」と、文学上の人物「エゴン・フォン・ネーメト」の二人の混合であることを象徴的に示しているのは、主人公が書いている二冊の書物である。一冊は『祖国のない男』、もう一冊は『さようなら、ヨーロッパ』。『祖国のない男』という表題は、先に述べたように、「アパトリッド」あるいは「故郷のない男」という表題のヴァリエーションの一つである。読者が読んでいる物語を、作中人物が書いているという入れ子構造は、キシュが好んで用いた形式であり、最初の小説『屋根裏部屋』にも、『砂時計』にも見ることができる。他方、『さようなら、ヨーロッパ』は、ホルヴァートが執筆していた自伝的作品で、彼の突然の死により未完のままに終わった。

このように、「アパトリッド」は、キシュ自身が語っているように、クロスワードパズルの問題をホルヴァートに現実起こった事件によって組み立てて、梔目の空白を、自己の手になる文学的人物像で埋めていった作品なのである。

2. アディ・エンドレ

2-1. ホルヴァートとアディ

「アパトリッド」の主人公がパリに到着した日の夜は、次のように描かれている。引用は第1節から。

オデオン劇場のそば、カルチエ・ラタン界隈のホテルに泊まった。そのホテルは、彼をいっそう憂鬱にした。夜、ナイトテーブルの上のランプを消すと、亡霊たちが、ホテルのシーツを死に装束のようにゆらゆらとたなびかせながら、近づいてきた。そのなかには、彼がちゃんと知っている一組の亡霊がいた。故郷のない紳士は、詩人とその恋人の姿を、まるで生きているかのように思い描くことができた。詩人を記念した書物で、二人の写真を見たことがあったから⁽³⁸⁾。つばの広い帽子をかぶった女、レーダは、顔に帽子の影が映っていて、まるで目元にヴェールをつけているようだった。しかし、その影の下からは、隠しきれない寄る年波と、好色そうな口元がのぞいていた。恋と病に衰えた男、詩人は、バセドー病で目が飛び出していたが、その目には、ジプシーのヴァイオリン弾きのように、まだ炎が輝いていた。レーダのトゥルバドゥールがこのホテルの一室に宿泊したことがあると知っていたのは、おそらく、その当時、故郷のない紳士だけだっただろう。⁽³⁹⁾

「レーダのトゥルバドゥール」は、ハンガリーの抒情詩人アディ・エンドレ（1877–1919）である⁽⁴⁰⁾。トランシルヴァニアのエルミンセント（現在はルーマニア領）に生まれ、22歳

38 つばの広い帽子をかぶったレーダとアディが見つめ合っている写真はよく知られており、詩集などにも挿入されることが多い。この事実は、アディという詩人にとって、「レーダ」の存在がどれほど大きかったかを示している。

39 Kiš, “Apatrid,” p. 203.

40 アディについては、アディ・エンドレ（徳永康元、池田雅之訳）『アディ・エンドレ詩集』恒文社、1977年と、アディ・エンドレ（原田清美訳）『新詩集』未知谷、2006年を参照。前者にはアディに関する小論が2篇収録されており、アディの文学的な背景を知るうえで貴重である。後者の「解説」では、アディの生涯に重要な役割を果たした三つの都市、ブダペシュト、パリ、ナジヴァールドを、豊富な写真資料とともに、紹介している。

で最初の詩集を出版するなど、早くから詩人としての才能の片鱗を見せていたが、詩才が開花したのは、26歳のとき、運命の女ディオシー・オドン夫人（ブリュル・アデル）と出会ってからである。アディの詩のなかで、「レーダ」Léda（アデル Adél のアナグラム）と呼ばれる彼女は、パリに住んでいた。1904年、アディはレーダを追いかけてパリに行き、ブダペシュトの日報の通信員として約一年間滞在する。その後、1912年に破局をむかえるまで、アディは毎年必ずパリを訪れた。1905年以降は、「ブダペシュト日報」に多数の詩と記事を寄稿しながら、政治活動にも身を投じ、鋭い革命思想で多くの若者に影響を与えた。詩人としての評価は、第三詩集『新詩集』（1906）と第四詩集『血と金』（1907）で定まる。1908年には、文芸誌『西方』*Nyugat*の創刊にかかわり、編集者を務めるなど中心的な存在として活躍した。国民詩人ペテーフィと並んで、ハンガリーでもっともよく知られている詩人である。

「アパトリッド」の主人公は、エデン・フォン・ホルヴァートをモチーフに造型されているにもかかわらず、第1節が、もっぱらアディにふれていることは、多少、奇異な印象を抱かせる。しかし、実は、アディは、キシユとホルヴァートを結びつける、重要な人物であった。「詩人」にまつわるもう一つの節をみよう。

ある詩人のおかげで、彼は、年若くして、愛についての神秘的な、暗号めいた言葉を知った。18歳のとき、ドイツ人の女子学生に恋をした彼は、この詩人が、愛のあらゆる場面を詩にしていることに気づいた（のぼせあがっているときも、落胆しているときも、恐れおののいているときも、後悔しているときも）。そして、翻訳に着手した。「折にふれて」訳した詩は、50篇にも及んだ。愛が一巡し、ドイツ語の詩となってきらめきはじめ、出版にこぎつけたときには、愛は結晶化を経て（スタンダード風と言うと）、情熱が下火になり、消えていく地点にあった。若き日のアヴァンチュールと愛の苦しみ、彼のもに残ったのは、すりきれたアルバムのような、翻訳詩のアンソロジーだった。他には、小説のなかの事物にこだまする紫色の反響と、文章にひそむ抒情の高まりだけ。批評家はそれを指摘するとき、いささか困惑することだろう。⁽⁴¹⁾

1918年、ホルヴァートは17歳のとき、父の新しい任地ブダペシュトで、民族独立と革命思想を説くアディ・エンドレの著作を知った。アディに心酔する青年グループと交流し、様々な政治集会に参加してもいる。

ホルヴァートがアディから受けた影響については、ホルヴァートの創作に、アディとレーダのイメージを見出す指摘もある⁽⁴²⁾。しかし、「アパトリッド」では、アディの生涯の政治的な側面については一切ふれられていない。ホルヴァートがはじめてアディを知ったのは、政治とのかかわりにおいてであったにもかかわらず⁽⁴³⁾。そこでは、アディは、あくまで、

41 Kiš, "Apatrid," p. 209.

42 ニボアは、1933年の戯曲『行ったり来たり』にアディとレーダの姿を見出している。Marieke Nieboer, "Erfgenamen van de Apatride" (MA thesis, Universiteit van Utrecht, 2006), p. 16.

43 フランソワの博士論文では、プレスブルグ時代のホルヴァートがアディの詩を読んでいた可能性について触れ、「もしそうであるなら、戦争のさなかにあつて、アディの詩は、若きホルヴァートの反戦主義と平和主義を養ったことであろう」とし、文学面における影響ではなく思想面での影響を重視している。François, *Histoire et fiction*, p. 17.

愛しいレーダを求めてパリとペシュトを幾度となく往復した、情熱的な抒情詩人として描かれている。この偏向には、アディに対する作者キシュの思いが反映されているように思われる。アディは、ハンガリーで少年時代を過ごしたキシュにとって、特別な詩人であった。うゑに引用した第11節の文章は、「ドイツ語」を「セルビア・クロアチア語」に置き換えてみれば、キシュのことを語っていると読むことさえ可能である⁽⁴⁴⁾。キシュがアディを知ったのは18歳のときであるし⁽⁴⁵⁾、また、20歳で恋に落ちたときに詩を書きはじめたこと、「アディの抒情詩ひとつひとつに、自分のありとあらゆる精神状態が詠われていることに気づいた」ことを述べている⁽⁴⁶⁾。キシュは生涯にわたって、フランス、ハンガリー、ロシアの詩を無数と言えるくらい訳したが、初めての記念すべき訳詩は、アディの「セーヌの岸辺に」、「友を待つ」、「カトゥールの死」の3篇で、1955年、雑誌『出会い』*Susureti*に掲載された。最初の訳詩集もアディの『血と金』で、1961年に出版されているが、これは、キシュの最初の小説『屋根裏部屋』『詩篇44』（合冊の形で1962年に出版）に先んじている。

2-2. 「聖なる美と苦悩の都市」

アディの詩をこよなく愛したキシュにとって、アディの街といえば、パリである。それは、キシュが、1959年、はじめてパリを訪れたときに書いたエッセイ「パリ旅行」にも明らかである⁽⁴⁷⁾。全集版で30ページ以上もある長いエッセイだが、まず、「マルセル・マルロー」と題した抜粋が、1960年1月、キシュ自身が編集人をつとめていた雑誌『展望』*Vidici*に掲載された。全文の掲載は、雑誌『作品』*Delo*においてで、1960年10月号から12月号まで、三回に分けて発表された。キシュが敬愛するさまざまな作家の名も挙げられているが、このエッセイは、アディに捧げられたものと言えるだろう。アディの作品は、詩の引用ばかりでなく、4ページにもおよぶ「パリからの手紙」の全文が織り込まれているからである。これは、「1904年2月28日、パリ」発信のもので、アディがパリから送った最初の通信である（同年3月3日の『シラージ』誌に掲載）。文面は、パリへの語りかけではじまる。「偉大にして聖なる都市よ、路地から路地へと僕はさまよう。君に恋焦がれ、少しでも近づきたいと願って。夢見心地のまま、もう数週間が過ぎてしまった。」パリへの熱情から、街をさまよい歩くアディは、一人の少女に遭遇する。美しい姿の少女はモデルをしているとき、画家に追い出された

44 デリッチは、「小説のなかの事物にこだまする紫色の反響」について、やや不正確ではあるが、インタビューでのキシュの発言との類似を指摘している。Делић, *Кроз прозу Данила Киша*, стр. 455. キシュは、1973年のインタビューで、次のように語っている。「私の散文の事物や事象には、ブルースト風の紫色のオーロラがうっすらとかかっている」。Danilo Kiš, “Doba sumnje,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, p. 48. キシュの言う「紫色のオーロラ」とは、夢、あるいは、非現実性を意味している。

45 インタビューでのキシュの言葉は、「アパトリッド」の主人公への表現に酷似している。「18歳のときにハンガリーの詩人、アディ・エンドレを知った。彼のせい、あるいは、彼のおかげで、僕は、彼の作品を無数に翻訳し、20歳の僕の、詩情と抒情の高まりを満たした」。Danilo Kiš, “Između politike i poetike,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, p. 204.

46 Danilo Kiš, “Politizirao sam celog života,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, p. 252.

47 Danilo Kiš, “Izlet u Pariz,” in Kiš, *Varia*, Sabrana Dela Danila Kiša, ed. Mirjana Miočinović (Beograd: BIGZ, 1995), pp. 523–555.

らしく、裸足のまま通りに立って、すすり泣いていた。アディは、「野蛮な」外国人で、フランス語をうまく話せないことを気にしながらも、少女にお茶をごちそうし、古物の靴を買ってやる。そして、「手に接吻もできないまま」、二人は別れる。「あの子が、僕を思い出すことがあるかどうかさえ、わからない」。この後、想像裡に交わした少女との会話から、アディは、「大きな悲しげな瞳をした野蛮人」という外見のなかに、自己の魂が潜んでいることにはじめて気づかされる。

おお、パリよ、それまで僕の魂を隠していた君が、見捨てられてぼろぼろの服を着たかわいい小さな売り子の姿を借りて、僕に魂を送ってきた。その少女を通して、僕は自分の魂を知った。それは、どんなにすばらしかったことか。⁽⁴⁸⁾

これを転機として、パリはアディに別の側面を見せはじめる。リルケの『マルテの手記』の主人公にとってそうであったように、この街には死の匂いがたちこめている。「今日、僕は死体安置所に行った。狭く醜悪な小部屋だった」。そして、「明日、僕は墓地に行くつもりだ。ハイネとモーパッサンの墓を訪ねて。彼らは永久不滅だと思われる。(中略)永久不滅が何だ！欲しいだけ、そして、分相応なだけ、生から掴みとらせよ。」アディにとって、パリは「美と苦しみ」の街であった。

死者と結びついたパリのイメージは、冒頭に引用した「アパトリッド」の第一章にも見ることができ、ここで重要なのは、熱っぽくパリについて語るアディの言葉のなかに、キシユが、「フランス人にはない何か」を見出していることである。それは、ドナウ川流域とモラヴィア川流域からやってきた知識人たち——スラヴ人であれ非スラヴ人であれユダヤ人であれ——に共通する二重のノスタルジアである。すなわち、「文学的故郷」としてのパリへのノスタルジアとそれぞれの故郷へのノスタルジア。アディは、この二つのノスタルジアの間を彷徨し続けた。「パリ旅行」において、キシユは言う。

アディ・エンドレは、もっとも名高く、同時に、もっとも悪評高いハンガリーの現代詩人。そして、西ヨーロッパのデカダンだった。生涯、ペシュトとパリを行き来し続けた。街をぶらついては、パリの、セーヌ川の夕日に魅了され、パリの偉大な歌い手に魅了されたが、つねにノマドの状態を保っていた。⁽⁴⁹⁾

アディの「ノマド」としての姿は、「さまよえるユダヤ人」の宿命を意識していたキシユに、文学者としての一つのあり方を示すことになった。キシユがアディを愛してやまなかったのも、アディの強靱な生き方への共感と尊敬があったからに他ならない。

キシユのパリへの情熱は、アディによってかきたてられ、パリに魅了された先人たちの作品、たとえばクルレジャの『大ホドルラホホル』や、ツルニャンスキの『パリの詩』⁽⁵⁰⁾、さ

48 Ibid., p. 529.

49 Ibid., p. 525.

50 Ibid., p. 533.

らには、フランスの作家、バルザック、ボードレー、ゾラ、プルースト、アポリネールらの作品⁽⁵¹⁾を通して燃え上がった。ベオグラードにいるときから、夢の中でパリをさまよい歩いていた彼にとって、パリは見知らぬ街ではなく、ノスタルジアをおぼえる街であった。そして、そのパリが、アディの言う「美と苦しみ」の街として、キシユの前に立ち現れるのは、1979年の「亡命」以降である。

このように提示されてきた「アパトリッド」の主人公と作者キシユの平行関係は、アディに導かれるかのように、パリという土地で、作者自身思いもよらない形で、究極的な一致を迎えることになる。

2-3. 運命が待つ街 – ホルヴァート

「故国のない紳士」がパリに来ることになったいきさつは次の通りである。4月のある午後⁽⁵²⁾、彼はアムステルダムを歩いている、ある看板にふと目をとめる。「明日、何があなたを待っているか？知っているのは神と悪魔、そして、彼らの弟子であるゴットリーブ氏だけ。」何とはなしに、占い師のもとを訪ねた彼は、「パリは、最後のチャンス」と言われる⁽⁵³⁾。迷信深いわけではなかったが、この言葉が何か気になって、「故国のない紳士」は、パリへ向かうことにする。こうして、物語の舞台はパリに移った。

さて、第24節は、次のような短い段落からなる。

故国のない紳士は、ホテルを5時に出た。ドアの前でしばしたたずみ、空を見上げてから、懐中時計を見た。そして、「公爵夫人は5時ちょうどに出かけた」と独り言を言った。⁽⁵⁴⁾

ポール・ヴァレリーが、文学における表現方法をめぐる会話のなかで、恣意的な表現の例として挙げたという有名な一文「公爵夫人は5時に家を出た」は、インタヴューやエッセイでキシユが好んで取り上げてきたものである。この一文をつぶやく「アパトリッド」の主人公の声にも、宿命に対するどこかアイロニカルな響きがこめられている。

そして、読者はまったく突然に、第25節の冒頭の信じがたい文章に遭遇することになる。それは、5時ちょうどにホテルを出たという、偶然の宿命的な帰結であった。

その一撃は、まったく突然の、予期せぬものだった。我らのアパトリッドが感じることはできたのは、頭頂部の刺すような痛みだけだった。薄暮が、近くに雷が落ちたように、ぱっと明るくなり、稲妻が意識を貫いて、力強い、恐ろしい炎で、彼の一生を照らし出した。それからすぐに、暗闇が訪れた。⁽⁵⁵⁾

51 Ibid., p. 532.

52 ホルヴァートがアムステルダムに到着したのは、5月である。

53 クラウス・マンによれば、ホルヴァートもアムステルダムで占い師から似たような言葉を言われたという。越前暹「今日のホルヴァート」『新劇』1973年6月号、67頁。

54 Kiš, “Apatrid,” p. 218.

55 Ibid., p. 218.

パリで「故国のない紳士」を待っていた「チャンス」は、アムステルダムのおい師が言ったように「最後」のものであった。そして、「アパトリッド」もまた、主人公の途切れていく意識で全篇の幕を閉じる。

僕が生まれた家のことを聞きたいのですか？ 僕の母は、フィウメの病院で僕を産んだのですが、その病院はすでに取り壊されました。僕の家にも記念板をつけることはできないでしょう。たぶん、取り壊されてしまっているでしょうから。もしかしたら、あなたは僕の名前を書いた記念板を三つか四つ、いろいろな街やいろいろな国でつけなければならないかもしれませんが、僕にはお手伝いはできそうもありません。生まれた家がどれだったのか知りませんし、子供時代をどこで過ごしたのかももう覚えていません。何語を話していたのかもよくわかりません。覚えているのは、イメージだけです。どこかの海辺で揺れるヤシの木とセイヨウキョウチクトウ。ドナウ川は、牧草地のそばを、深緑の水をたたえて流れています。それと数え歌。en-den-dina, ti-raka, tina...⁽⁵⁶⁾

ヤシの木、セイヨウキョウチクトウ、ドナウ川。すべて、『砂時計』に織り込まれたキシユ自身の記憶である。また記念板を取りつける話は、はじめにふれた断片「A と B」にも見られる、少年時代を過ごした家をめぐる会話⁽⁵⁷⁾に類似している。

「故郷のない紳士」の死に方は、現実の主人公ホルヴァートの死に方と同じである。1938年6月1日のパリ。強風が吹く荒れ模様の天気。午後7時ごろ、『神なき青春』の映画化を計画していたアメリカのプロデューサーに会った帰り道、シャンゼリゼ通りを歩いていると、突風が舞い、雷が落ちた。街路樹の下に逃れたホルヴァートが、ふたたび歩き出したとき、折れた枝が落ちてきて後頭部を直撃し、ホルヴァートは即死する。波乱に満ちた生涯を象徴するかのような劇的な結末。キシユが、ホルヴァートを文学的な題材とみなしたのも、その死が象徴する「宿命」のゆえであった。「アパトリッド」は、典型的な「中央ヨーロッパ」人を主人公に、その宿命のあり方を描いた作品である。

2-4. 運命が待つ街 - キシユ

ホルヴァートが死んで半世紀が過ぎた1989年、キシユもまたパリで死を迎える。その死は、ホルヴァートの場合と同様に、その人の生き方と結びつけて語られることが多い。キシユの胸に巣食った病魔の原因が故国喪失の痛みにあると主張する、マトヴェイェヴィチの鋭い指摘もさりながら、文学と人生の結びつきを追求してきたキシユ自身を、愕然とさせた「宿命」がある。すなわち、1982年に発表された短篇「死者の百科事典」の内容との不思議な一致である。

56 Ibid., p. 219.

57 ここには、ケルカバラバールシュ時代に住んでいた家を訪ねたキシユと友人の会話が書かれている。友人は、「きつとここに、1942年から47年、ここにユーゴスラヴィアの文人D.K.が住んでいたという記念板が取り付けられるぜ」「ありがたいことに、ここはもうすぐ取り壊されることになっている」。Kis, "A i B," p. 302. 家は取り壊されたが、記念板は、キシユが通ったバクシャの小学校に取り付けられている。

「死者の百科事典」は、人生と書物の関係の物語である。一人の女性が旅行先のスウェーデンの国立図書館で「かの有名な」、「死者の百科事典」を見つけ、最近亡くした父親についての記述を探して読みふけるという、ボルヘスの「バベルの図書館」を想起させられる筋書きである。書物をめぐるこのような抽象的な主題は、父親の死を悼む娘の語りから紡ぎだされる切々とした調子とともに、「知的な抒情」の世界に転換されていく。物語は、女性が夢から覚めて終わる。しかし、たとえば、夢のなかの百科事典に掲載されていた、父親が描いたという絵、「皮をむかれ、破裂した、巨大なオレンジにそっくり」な絵に、娘は見覚えがない。その絵が模倣していたのは、実は、父が体内に育んでいた絵、すなわち、父を死に至らしめた腫瘍であった。この物語を振り返って、キシュは次のように語っている。

昨年 11 月、肺癌に冒されていると知ったときには、かなりの衝撃を受けた。僕は自分に言いかけた。これはお前に下された罰だ、と。この物語（筆者注「死者の百科事典」）を書いていた時期は、もちろん、僕の肉腫、腫瘍が大きくなっていく時期に一致していた。⁽⁵⁸⁾

キシュは、「作り話」に嫌悪感を抱いて人生と書物の関係をめぐる話を書き続けた作家である。その作家を襲った病を、果たして偶然と言えるだろうか？

キシュの病の宿命的な側面はそれにとどまらない。キシュが自らの文学的創造の源とみなしていた「さまよえるユダヤ人」の原型である、父エドゥアルドが、1944 年にアウシュヴィッツで消息を絶ったときの年齢は、54 歳であった。そして、キシュの死去の年齢も同じ 54 歳。キシュが、作品世界でも、実生活においても、あくまでこだわり続けた父親よりも生き延びることはなかった。

パリで死を迎えることを、キシュは、若い日から予感していたであろうか？「パリ旅行」は次のような文章で終わっている。

どの駅を運命が僕たちの最後の駅に決めるか、僕たちにわかるだろうか？⁽⁵⁹⁾

3. 「中央ヨーロッパ」

3-1. 先行研究

キシュが、ホルヴァートを文学的創造にふさわしい人物とみなしたのは、ホルヴァートに「中央ヨーロッパ」の特性を見出したからである。言語、人種、国籍を越えて、キシュ自身とも共通しているその特性のゆえに、キシュは、エゴン・フォン・ネーメトという主人公を生み出すことができた。しかし、「アパトリッド」には、「中央ヨーロッパ」という単語は一度も出てこない。キシュ自身、パリへの「亡命」以降、「中央ヨーロッパ」をめぐる議論に積極的に参加しているにもかかわらず。これは、「アパトリッド」の執筆を行っていた 1980 年には、キシュが、まだ文化的統一体としての「中央ヨーロッパ」という思想を明確

58 Danilo Kiš, “Trajno osećanje krivice,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, p. 228.

59 Kiš, “Izlet u Pariz,” p. 555.

に把握していなかったためと考えてよい。

キシユの「中央ヨーロッパ」論については、内外において研究が進んでいる。まず、そのうちのいくつかについて、簡単に述べておくと、特に内容面においてまとまっているものに、セルビアにおけるキシユ研究の第一人者デリッチの「キシユと中央ヨーロッパ」が挙げられる⁽⁶⁰⁾。デリッチによれば、キシユの中央ヨーロッパ観は、ナショナリズムとコスモポリタニズムの問題、文化的な帰属の問題、ユーゴスラヴィア性の問題、世界へのアピールという市場の問題など、多種多様な問題が絡み合っている。デリッチは、キシユのエッセイ「中央ヨーロッパ変奏曲」とインタビューでの発言をもとに、これらの問題について精査している。

キシユの「中央ヨーロッパ」について、作品からの読解を行なったのはバルベデッテである。キシユがまだ存命中の1986年にフランスの*SUD*誌で行なわれたキシユの特集号で、バルベデッテは「キシユと中央ヨーロッパ小説」と題した論文を寄せた⁽⁶¹⁾。『庭、灰』から『死者の百科事典』にいたるキシユの小説を扱いながら、バルベデッテは、キシユが「中央ヨーロッパ」という過去の世界を主題としながらも、思い出に耽溺することなく、感傷を取り除くことができるのは、キシユの「言語」へのこだわりゆえであるとしている。キシユは、「過ぎ去った世界の建造者であるというよりは、金銀の細工師であった」⁽⁶²⁾。

最近の研究としては、グボズデンの「中央ヨーロッパの作家ダニロ・キシユ」が挙げられる⁽⁶³⁾。グボズデンは、とくに、キシユの『砂時計』が、「中央ヨーロッパ」を舞台とすることに着目し、『砂時計』と「中央ヨーロッパ」の関わりを精査している。また、グボズデンの考察は、キシユだけにとどまらない。「中央ヨーロッパとは何か」という一般的な疑問に答えるべく、「中央ヨーロッパ」について語りうるさまざまな可能性を列挙し、丁寧に読み解いてもいる。しかし、キシユの「中央ヨーロッパ」観については、『砂時計』からの読み取りに終始している。「自由亡命」した後、活発になったクンデラ、コンラードたち、「もう一つのヨーロッパ」の作家たちとの交流を通して、キシユの「中央ヨーロッパ」観は変遷したか、あるいはしなかったのか、という点については言及がない。そこで、まず、キシユの「中央ヨーロッパ」観を一つの固定的な概念として捉えることができるかどうかについて、次章で検討したい。

3-2. キシユの「中央ヨーロッパ」概念の変遷

キシユは、創作の初期から「中央ヨーロッパ」という語を用いてきた⁽⁶⁴⁾。はじめて「中央ヨーロッパ」という語を用いたのは、1965年に発表した『庭、灰』においてである。第9章で、キシユは、この語を二度用いているが、二度とも、主人公アンディの父についての表現であ

60 Јован Делић, “Киш и Средња Европа,” *Књижевни погледи Данила Киша* (Београд: Просвета, 1995), стр. 177–200.

61 Gilles Barbedette, “Danilo Kis et le roman d’Europe centrale,” *SUD* 66 (1986), pp. 64–70.

62 *Ibid.*, p. 70.

63 Владимир Гвозден, “Данило Киш као средњоевропски писац: прилог и писању идентитета,” *Чинови Присвајања* (Нови Сад: Светови, 2005), стр. 133–149.

64 「中央ヨーロッパ」を指す語は、セルビア・クロアチア語で、*Srednja Evropa* と *Centralna Evropa* の二通りあるが、キシユはとくに使い分けを行っていない。

る。一度目では、真ん中で分けた髪、鉄縁の眼鏡という特徴から、この男は、主人公アンディの父親とおぼしき人物であることが示唆されている。

黒っぽくて重々しい背広の仕上げには、神父の襟と将校の襟の合いの子のような、パリッとした白い襟が輝いていた。まるでくびきのように、襟が首に巻きついている様子は、新大陸から入ってきたカジュアルな軽装とは異なっている。むしろ反対に、大陸の、中央ヨーロッパの精神へ、ヨーロッパのブルジョアの伝統へ忠誠を示す証であるかのようだ。⁽⁶⁵⁾

しかし、二度目には、「エドゥアルド・サム」という名前をはっきりと出したうえで、「中央ヨーロッパとバルカンの商人」という言い方をする。すなわち、この段階での、「中央ヨーロッパ」の概念は、キシュにとって、商人という言葉で示唆されている、ユダヤ人の運命と密接に結びついていることがわかる。また、「中央ヨーロッパ」という語に並列して「バルカン」という語が挙げられていることから、地理学的に両者が異なる地域を表わしていることは言うまでもないが、どこまでが中央ヨーロッパで、どこからがバルカンであるのかは、作品からは読み取れない。ここで、さらに重要なのは、両者をともに含有しうる「東ヨーロッパ」という語が用いられていないことである。

キシュが、「東ヨーロッパ」という言葉を、小説であれ、エッセイであれ、インタビューであれ、ほとんど用いなかったことは特筆すべきである。少なくとも、14巻本全集に収められた作品では、後述の「中央ヨーロッパ変奏曲」で、バルトク・ベラが「東ヨーロッパ」の言葉にこだわった理由を述べるための一度きりである。しかも、それはバルトクの言葉の引用にすぎない。「東から来た」詩人という類の用法は、たしかに、先に見たエッセイ「パリ旅行」でも見ることができるが、それは地理学的な正しさは持っていない、ヨーロッパという概念につながるものではなかった。つまり、キシュの語彙に「東ヨーロッパ」はなかったと考えてよい。この状況が、はたして、ユーゴスラヴィアにおいて特異な現象であるかどうか、判断は極めて難しいが、少なくともキシュにとって、「中央ヨーロッパ」とは「東ヨーロッパ」の対立概念というものではなく、もっと身近で、自然な語彙であったことを示している。

『庭、灰』の後、キシュが再び「中央ヨーロッパ」という言葉を用いるのは、1972年発表の『砂時計』においてである。ここでもやはり、「バルカンと中央ヨーロッパ全域」、「1936年、ブダペシュトで行なわれた、中央ヨーロッパのプラスバンド・コンクールで優勝したスポティツァ鉄道音楽隊」という文脈で現れる。繰り返し使用されるものに、「中央ヨーロッパ時間」という表現がある。いずれにせよ、どれも、具体的な地域を表わす用法といえる。次の作品『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』（1976年）では、ハンガリーのとある町について、「中央ヨーロッパの小都市」という形容を用いている。これ以後、作品、インタビューでは、もっぱら、ユダヤ人に対する形容に使われているだけである。例をあげると、「中央ヨーロッパのユダヤ商人」「ノイローゼは中央ヨーロッパのユダヤ人の風土病みたいなもの」（以上、エッセイ集『解剖学講義』1978年）、「中央ヨーロッパのユダヤ商人」（『死者の百科事典』1983年）。

65 Danilo Kiš, *Bašta, pepeo*, Sabrana Dela Danila Kiša, ed. Mirjana Miočinović (Beograd: BIGZ, 1995), p. 146.

この時点までの、「中央ヨーロッパ」という語に対するキシユの認識は、バルカンと対比された具体的な地域の名称であり、さらに、いまは失われたユダヤ社会を総体的に捉える表現に限定されていることがわかる。

ところが、『死者の百科事典』を含むはじめての作品集を刊行した1983年以降、キシユは、「中央ヨーロッパ」を、自らの文学が帰属する場という意味で使用するようになる⁽⁶⁶⁾。1983年2月のインタビューにおける、「それから、自分は反体制の作家でもありません。こういう言い方は意味があるとすれば、中央ヨーロッパの作家だと言えるかもしれません」⁽⁶⁷⁾という発言を皮切りに、同じ年の10月には、ユーゴスラヴィア文学について、「中央ヨーロッパとスラヴの統一体」の一つであるとしている⁽⁶⁸⁾。これ以降、文化的統一体としての「中央ヨーロッパ」という発言が時とともに増えていく。それは、クンデラ⁽⁶⁹⁾やコンラード・ジェルジュ⁽⁷⁰⁾との交流を通じて、彼らとは一線を画しながらも、作家のアイデンティティの場としての「中央ヨーロッパ」という考え方に共感したためであった。

ところで、この80年代の「中央ヨーロッパ」をめぐる論争について、もっとも本質をついた発言をした人物は、アメリカの作家スーザン・ソントグではないだろうか。1988年、リスボンで開催されたウィートランド財団の第2回会議で、文化的統一体としての「中央ヨーロッパ」を主張するコンラード、ミウオシュ、キシユらと、それを認めないソヴィエトの作家、タチアナ・トルスタヤ、レフ・アニンスキーらの間で、激しいやりとりが交わされたとき、ソントグは、「中央ヨーロッパ」にもソヴィエトにも属さない立場から、「中央ヨーロッパ」という概念の必要性について、次のように語った。

それは、確かに、西側のために、西側の知識人に消費されるために創られた概念です。反ソヴィエトの概念、と言うこともできるでしょう。しかし、それは、西側の知識人に教えようという試みだったのです。そのためには、どうしても必要だったのです。今はもう、時代遅れになっているかもしれません。ですが、言っておきます。5年前、10年前には確かに必要だったのです。ソヴィエト圏にいる国々も、文化的には、ソ連に追随しているのではない、と言うことが。彼らには、ソヴィエトの戦車がやって来るまえ、あるいは、ソヴィエトの影響を受けるまえから、文化があっ

66 また、この年の11月には、クンデラの有名なエッセイ「誘拐された西欧、あるいは中央ヨーロッパの悲劇」が雑誌『論争』*Le Débat*に掲載され、中央ヨーロッパをめぐる論争が活発に行なわれた。

67 Danilo Kiš, “Poslednje pribežišče zdravog razuma,” in Kiš, *Život, literatura*, p. 87.

68 Danilo Kiš, “Značaj dobrog i odanog čitaoca,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, p. 101.

69 キシユとクンデラの交流については、クンデラのホームパーティーでの情景を克明に描いた Misurella に詳しい。このエッセイによると、キシユはクンデラの演習「偉大な中央ヨーロッパの小説」に出席していたそうである。Fred Misurella, “Milan Kundera and the Central European Style,” *Salmagundi* 73 (1987), pp. 33–57. クンデラは、キシユの死から10年あまり過ぎた2000年、忘れ去られないようにとメキシコの雑誌『レトラス・リブレス』*Letras Libres*にキシユについてのエッセイを寄稿している。このエッセイで、クンデラは、「(キシユは)80年代パりに住んでいた私の世代で、もっとも偉大な作家だった」と述べている。[<http://www.letraslibres.com/index.php?art=6228>]

70 コンラードとキシユの親しい交流については、キシユのインタビューにおける数々の発言だけでなく、キシユの訃報に際して、コンラードが寄せた追悼文からも伺える。Derd Konrad, “Danilo Kiš,” *Vidici* 4–5 (1990), pp. 70–75.

たと言うことが、彼らが、ヨーロッパの偉大なる伝統の一部を担ってきたと言うことが。そこにあるのは、ただ単に「東ヨーロッパ」と呼ばれるものではない、と言うことが。(中略)それは、西側の知識人への授業でした。文化的な地理学について、いくらか大きな、そしてより洗練された概念を教えるための。⁽⁷¹⁾

すなわち、80年代における「中央ヨーロッパ」とは、西側に対する「教育的措置」であり⁽⁷²⁾、共産主義圏という言葉と同義語になっていた「東」という概念の解体の試みであった。「中央ヨーロッパ」の作家を自認するミウォシュ、クンデラ、そしてキシュらが肌身をもって感じていた文化上、地理上の特性。それには、それぞれの個人によって、小異があるとしても、「東」という単純化された概念のアンチテーゼとして有効であるという点は一致している。そして、確かに、「中央ヨーロッパ」とはどこを指し、どの人々が属するのかという質問に対する、はっきりとした答えを得ることはできない。「明確な定義がないこと」が、「中央ヨーロッパの定義」とさえ言えるかもしれない。しかし、そこに共通の特性があることは、これまで「アパトリッド」について検討してきたことから、十分に理解できる。

さきほどの会議で、ロシアの亡命作家ヨシフ・ブロツキーが、トルスタヤに同調し、「中央ヨーロッパ」の概念に否定的な態度を示したことは、「中央ヨーロッパ」の作家や他の参加者たちに驚きをもって受けとめられた。ブロツキーの態度は、亡命者が母国に対してもつ複雑な心理を表していると言えなくもないが、反ソヴィエト、反共産主義ではなく、反大国主義の影を見抜いたことから生まれたものである。会議に参加していた「中央ヨーロッパ」の作家の多くが、チェコ、ハンガリー、ポーランド、ユーゴスラヴィアといった小国の出身者であり、「中央ヨーロッパ」とは、彼らにとって、大国と大国の狭間で苦悩してきた地域であった。それは、歴史的な問題にとどまらない。小国の文学は、エキゾチスムという色眼鏡を通して見られる危険と常に隣り合わせである。こうした小国の文学ゆえの悩みを持ち、他方でラテン・アメリカ文学の形成と着実な展開を、深い関心をもって見つめてきたキシュにとって、「中央ヨーロッパ」を、マイナー文学からの脱却の一つの足がかりにしたいという思いもあった。

こうした状況のなかで、キシュは「中央ヨーロッパ変奏曲」というエッセイを発表する。このエッセイが、まず、アメリカとフランスで発表され、ユーゴスラヴィアで発表されたのは翌年になってからという事態も、「中央ヨーロッパ」という言葉が、西側へのアピールであったという側面の事実を示している。

3-3. 「中央ヨーロッパ変奏曲」

「中央ヨーロッパ変奏曲」は、1986年、雑誌『逆流』*Cross Currents* に発表された、38の断章からなるエッセイである。キシュは、大きく分けると、定義をめぐる問題、ユダヤ社会

71 “The Lisbon Conference on Literature: Central Europe and Russian Writers,” *Cross Currents* 9 (1990), p. 119.

72 赤塚は、クンデラの「中央ヨーロッパ」について、同様の指摘を行なっている。赤塚若樹『ミラン・クンデラと小説』水声社、2000年、339頁。

との関連性、亡命という三つの観点から「中央ヨーロッパ」の概念を論じている。

エッセイは、いかなるときにも「文学者」であろうとするキシユらしい始まりを見せる。

はっきりとした境界はなく、一つの中心地があるわけでもなく、中心地が複数あるわけでもない。今日、「中央ヨーロッパ」は、アナトール・フランスの二巻目（『ペンギンの島』）に登場するアルカの竜、象徴主義運動に比較されたあの竜にますます似てきた。すなわち、姿を見たと思っている者のなかで、それがどういう姿をしているのか言うことができる者が一人もいないのだ。⁽⁷³⁾

アナトール・フランスの竜を用いた比喩は、中央ヨーロッパの概念の曖昧さを示すとともに、キシユにとっては、これが文学上の概念であることを暗に示している⁽⁷⁴⁾。この後、キシユは、「中央ヨーロッパ」の概念にとって、否定的な要素をあげていくが、特に、第4章の「今日、これほど多様な民族文化や言語が存在する、広大な地域を統一できるとしたら、それは、ただうまく単純化して見せた結果にすぎないように思える。差異の無視と類似の強調。（それは、類似を無視し、差異を強調するナショナリストの逆ヴァージョンでしかない）」という意見表明は、何よりもナショナリズムを嫌ったキシユならではの倫理の表明である。プロツホ、ムーヅル、カール・クラウス、ヨーゼフ・ロートをはじめ、クルレジャ、ペトリー・ジェルジュ、アディといった、さまざまな作家を例にとって、キシユは、中央ヨーロッパという概念の基盤のもろさを明らかにしながら、それが「ヨーロッパに対するノスタルジア」に基づいた架空の概念であると主張する。ユーゴスラヴィアに関しては、主にクロアチアの作家、マトシュ、ウィエヴィチ、クルレジャらに見られるウィーン・アレルギーと、セルビアにおけるロシア文学への傾倒が挙げられ、ここでも文化的統一体としての「中央ヨーロッパ」は否定されている。

しかし、この否定的な態度は、ユダヤ社会に言及しはじめたときに一変する。

中央ヨーロッパの知識人たちは、古くからの反ユダヤ主義による苦難のほかにも、耐えがたいトラウマを、二度、経験した。ファシズムと Kommunismus だ。ファシズム（を生き延びたと仮定して）が衰退し、西ヨーロッパのイスラエル主義者の間で生まれたような、犠牲に関する両義的な概念が彼らの間に生まれるまえに、スターリニズムが到来した。スターリニズムの提唱者にはユダヤ人も多数いたが、彼らは自由を謳歌させてもらえなかった。（中略）この広い中央ヨーロッパの盆地で、今日、ユダヤについて語られたり書かれたりすることが、ユダヤ人にとっても非ユダヤ人にとっても、意に沿わない、不快な気持ちを引き起こす理由は明らかだ。⁽⁷⁵⁾

73 Danilo Kiš, “Varijacije na srednjoevropske teme,” in Kiš, *Život, literatura*, p. 35.

74 「アルカの龍」の比喩は、象徴主義についてのエッセイでもふれられており、キシユはマルセル・レイモンの『ボードレールからシュールレアリスムへ』を引用源にあげている。Danilo Kiš, “O Simbolizmu,” in Kiš, *Varia*, p. 268. 同書の第一部「逆流」の第一章「象徴主義に関する考察」の冒頭の文章は、キシユの文章によく似ている。「ひとは好んで象徴主義の運動をアルカの竜に比較した。この竜は『ペンギンの島』の第二巻にあらわれ、それを認めたと言ったひとびとの誰一人として、それがどのような形であったかを語るができなかった竜だ。」マルセル・レイモン（平井照敏訳）『ボードレールからシュールレアリスムへ』思潮社、1995年、52頁。

75 Kiš, “Varijacije na srednjoevropske teme,” p. 51.

そして、カフカ、ケストラーの名を挙げ、ウィーンで生まれた精神分析、カール・ポパーの科学哲学に言及して、文学言語の探求、心のなかにある無意識の領域の探求、科学の方法の批判的探求に関わる仕事、いずれも探求という性格をきわめて明確に備えている仕事が、すべて、「中央ヨーロッパ」のユダヤ人によって着手され、また達成されたことを浮き彫りにしている。

こうして「中央ヨーロッパ」という概念に具体性を持たせたうえで、キシュは、おもむろに、エステルハージ・ペーテルらの作品を読んだときに感じる感覚的な特徴にふれて、「中央ヨーロッパ」に共通する感覚がユダヤ社会だけのものではないことを示唆する。そこで、前半に述べた否定的な意見は、実は見せかけにすぎず、統一的な概念を効果的に打ち出すための、いわば工作であったことがわかる。言い換えれば、キシュにとって、「中央ヨーロッパ」はユダヤ社会という実在の網の目を通して見たとき、ようやく姿を現してくる、差異の限界に位置している観念なのである。このように錯綜する筋道を経て、キシュのエッセイは、中央ヨーロッパの作家であることの定義を明らかにする。中央ヨーロッパへの帰属は、特定の地域に住んでいることで自動的になされるのではない。

中央ヨーロッパとして知られる、文化への帰属意識が、最終的に行動の不一致につながることになるにせよ、中央ヨーロッパの作家と呼ばれる、あるいは自らをそう呼ぶ作家の多くは、亡命しているか（ミウォシュ、クンデラ、シュクヴォレツキー）、辺境に追いやられているか、地下出版するか（コンラード）、刑務所にいる（ハヴェル）。（中略）その男は、やがて、不和の原因が、彼自身の抑圧と、そして、ほとんど無意識の切望、より広い、より民主的なヨーロッパの地平への切望にあると気づく。まさにそのために、彼は非難されたのだ。この認識の先に待っているのは、亡命か牢獄だけである。⁽⁷⁶⁾

キシュはスターリンの粛清を扱った小説『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』をめぐる、ユーゴスラヴィアの既成文壇と激しい論争を繰り広げた。まさに、この作品に見られる「ヨーロッパの地平」への志向ゆえに、キシュは非難されたのである。引用文には、自らの苦い体験と、権力にすりよる作家たちへの厳しい批判がこめられている。

だから、キシュは、次の章で、現在自らが置かれている状態、「亡命」について語る。キシュにとって「亡命」の問題とは、何よりもまず、言語の問題であった。

一度、自らの母国から亡命すると、作家に残されるものは言語しかない。それこそが、彼らの亡命のしるしだ。「亡命という体系」に屈服しない一人の人間として、高い代償を払って、自分の言葉で書き続ける。一つの意味でしか用いることのできない新しい言語の誘惑から逃れることができるのであれば、何よりもまず、それは、明確な自覚、すなわち、自分が書いているのは、言葉によるだけではなく、存在そのもの、気風、神話、記憶、伝統、文化、言葉の連想の働き、そういったものすべて、つまり、言葉の自動化をへて手の動きへと変換されるもの（またその逆も）すべてによって、書いているのだ、という明確な自覚である。⁽⁷⁷⁾

76 Ibid., p. 54.

77 Ibid., pp. 54-55.

キシユは、「亡命」前も後も、一貫してセルビア・クロアチア語で書き続けた。フランス語はもとより、ハンガリー語、ロシア語にもよく通じていた彼が、セルビア・クロアチア語で執筆することに頑なにこだわった理由は二つある。一つは、子供時代から多言語の環境で過ごしてきたというキシユの伝記的な事実である。父が子供たちにハンガリー語とドイツ語を教えようとした一方、母は、息子に対してセルビア・クロアチア語でしか話そうとしなかった。キシユにとって、多言語はむしろ、一言語の習得を妨げるという形で表面化している。それは、自伝的三部作のなかで、植物の名前をラテン語で書いたことについてのキシユ自身の説明からも明らかになる—「植物の名前はハンガリー語で覚えたから、セルビア・クロアチア語でなんとと言うのかわからなかった」⁽⁷⁸⁾。キシユが目指したのは、むしろ、一つの言語の完全な習熟である。「中央ヨーロッパ変奏曲」の未発表の断片には、言葉が秘めている力について、具体的な例をあげた文章がある⁽⁷⁹⁾。

もう一つの理由は、「亡命という体系に屈しない」ためである。「亡命」してからも執筆言語を変えないことは、キシユにとって、「亡命」先の国であるフランスとも「適切な距離」を保つための一つの方法であった。キシユは、「亡命」により、ユーゴスラヴィアと物理的な距離をとったが、言語を変えることで心理的な距離をさらに広げることとはしなかった。キシユが想定する読者は、いつも、ユーゴスラヴィアの人々であった。学生時代からの夢の街に住みながら、彼は、敬愛するアディと同じように、二つのノスタルジアのあいだで、アイデンティティを求めて、闘い続けたのである。

キシユのエッセイ「中央ヨーロッパ変奏曲」は、「中央ヨーロッパ」の概念に対する否定的な意見を認めたうえで、ユダヤ社会とのかかわりを土台に、民族を超えた共通性を示したものである。K（カフカの主人公）を、あらゆる中央ヨーロッパの作家に見られる、永遠の曖昧さのしるしの象徴とすると、キシユは、このエッセイの矛盾を矛盾として認めたうえで、それを「中央ヨーロッパの作家」の特質として普遍化したのである。

3-4. 帰属先としての「中央ヨーロッパ」

「亡命」前のキシユにとっての「中央ヨーロッパ」は、何よりもまず、文学的な主題であった。アウシュヴィッツを扱った、二作目の小説『詩篇 44』にはじまり、自伝的三部作、そして、共産主義の下で、過酷な運命に苦しんだ、ブコヴィナ、チェコ、ハンガリー、ユーゴスラヴィ

78 Danilo Kiš, “Književna generacija – šta je to?” in Kiš, *Varia*, p. 491. コンラードは、キシユのハンガリー語について、「子供言葉で、少し難しいことを正確に伝えたいときには、すぐフランス語に切り替えていた。だが、彼が持っているハンガリー語の知識はすばらしかった」と述懐している。Konrad, “Danilo Kiš,” pp. 74–75. また、キシユが死の直前につぶやいた言葉がハンガリー語の詩であったという話もある。Zoran Đerić, *Andeli nostalgije: poezija Danila Kiša i Vladimira Nobokova* (Banja Luka: Besjeda, 2000), pp. 226–227.

79 キシユは、この問題について、セルビア・クロアチア語で「黒」を意味する *kara* という単語を例にとり、詳しく述べている。「*kara* というトルコ語系の単語からは、歴史的な響きが伝わってくる。悲鳴、馬のいななき、子供の泣き声、むせびなく母の声。それは、漆黒の闇。血のような、カラスのような。」Danilo Kiš, “Varijacije na srednjoevropske teme (fragmenat),” in Kiš, *Skladište*, p. 209.

アのユダヤ人を扱った短篇小説集『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』。そして、短篇「アパトリッド」もまた、すでに述べたように、典型的な「中央ヨーロッパ」人を主人公に、その宿命のありかたを描いた作品であった。これらの作品に示されているように、中央ヨーロッパのユダヤ人の失われた世界は、キシュの創作の大きな主題の一つであった。「中央ヨーロッパ」が文学上の対象であるといったのは、その意味においてである。

しかし、「亡命」後、「中央ヨーロッパ」論争に関与するうちに、キシュは、文学的な主題であるはずの「中央ヨーロッパ」がナショナリズムを越えた帰属意識の場であること、「中央ヨーロッパ」にアイデンティティを帰属させることをはっきりと表明する。それは、当然、ユーゴスラヴィア文学に距離を取るようになったが、1986年のインタビューでは、まだ控えめに、「もし僕にセルビア文学やユーゴスラヴィア文学とは異なる様式、感性があるとすれば、それは中央ヨーロッパ複合と呼ぶことができるのではないか」と述べている⁽⁸⁰⁾。こうして、キシュは、これまで否定的な意味で用いられていた「中央ヨーロッパ・コンプレックス」という言葉を、肯定的な意味でとらえなおし、「スラヴとハンガリーの抒情性と、ユダヤの血とから生まれる、一つまみの塩のようなアイロニーとの化合物」と説明している⁽⁸¹⁾。

そもそも、いわゆる中央ヨーロッパの国々、チェコ、スロヴァキア、ポーランド、ハンガリーなどと異なり、今も昔も、ユーゴスラヴィア全土が「中央ヨーロッパ」と見なされることはないと言ってよい。ユーゴスラヴィア地域において、一般的に、「中央ヨーロッパ」に含まれるのは、過去において、オーストリア・ハンガリー帝国の属領下にあった、スロヴェニア、クロアチア、ヴォイヴォディナ自治州である（ボスニアの一部が入る場合もある）。オスマン・トルコの支配を長く受けたその他の地域では、また別の歴史的意識が生まれていた。さらに、もう一つの可能性としては、カトリック国と正教国という分類がある。こちらのほうは、ユーゴスラヴィアに限らない、分類のありかたとして、クンデラも言及している。いずれにせよ、問題は、「中央ヨーロッパ」の概念が、ユーゴスラヴィアの解体に結びつく危険があったということである。本来、ナショナリズムを超越して生まれたはずの思想が、ユーゴスラヴィアにおいては、ナショナリズムの喚起につながる⁽⁸²⁾。アイデンティティの帰属先としての「中央ヨーロッパ」を表明することに、キシュがこれまで消極的であったのは、この概念に潜んでいる、そのようなユーゴスラヴィア独自の問題点に気づいていたからであろう。

しかし、そのような問題点も、「ユーゴスラヴィア」が「ユーゴスラヴィア」として存在すればこそである。徐々に活発になっていくナショナリズムのなか、「ユーゴスラヴィア」という言葉が大セルビア主義との結びつきで語られはじめると、キシュはもはや「ユーゴスラヴィアの作家」を名乗ることはできなくなった。死の年、1989年のインタビューで、「唯一のユー

80 Danilo Kiš, “Ironičan lirizam,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, p. 218.

81 Ibid., p. 218.

82 沼野は、「中央ヨーロッパ」という概念を検討しながら、そこにひそむ相反する方向性、ナショナリズムの方向性とコスモポリタニズムの方向性について鋭く指摘している。NUMANO Mitsuyoshi, “Is There Such a Thing as Central (Eastern) European Literature? An Attempt to Reconsider ‘Central European’ Consciousness on the Basis of Contemporary Literature,” in HAYASHI Tadayuki and FUKUDA Hiroshi, eds., *Region in Central and Eastern Europe: Past and Present* (Sapporo: Slavic Research Center, 2007), p. 133.

ゴスラヴィアの作家」(強調は筆者による)と自己を表現したのは、キシユの考える「ユーゴスラヴィア」という概念が、事実として消滅しつつあったからである。キシユは、1988年に、すでに、内戦の可能性について言及しているの、ユーゴスラヴィアの暗い未来を確実に見通していたであろう。1989年、こうした状況のもとで、キシユは、ついに、こう述べる。「精神的な意味で、僕は、ユーゴスラヴィアから中央ヨーロッパへと転じた」と⁽⁸³⁾。もとより「セルビア人」でも「クロアチア人」でもなく、そして政治体制の変化とともに「ユーゴスラヴィア人」にさえもなれなくなった自分の帰属先を、キシユは「中央ヨーロッパ」に見出すほかはなかった。このように書けば、あまりにも消極的に響くけれども、そこには、むしろ、社会と政治の動向に抵抗して、文学創造の深い動機となるアイデンティティを確認するという積極的な意味があったことは言うまでもない。

結論

キシユは文学上の対象に「適切な距離」をとることを、強く意識してきた。母のミリツアの像が自伝的な作品にさえ、あまり表現されないのは、「母への愛があまりに深く、うまく距離をとることができなかつたためだ」、と言うほどに。キシユは、異化、断片化、モンタージュ、羅列、ディテールへの固執、パステイーシュなど、あらゆる文学手法を用いて、文学上の対象に「距離」を取り続けた。

この文脈で押さえれば、キシユの「亡命」——それは「ジョイス的亡命」「自由亡命」である——が、本国と適切な距離を保つための文学手法であったことがわかる。物理的な距離がひらけば、心理的な距離は近づく。ノスタルジアは、亡命のもっとも厄介な副作用である。ロシアの亡命作家ジノヴィー・ジニクは、ジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』において、ダブリンがあればほど壮大なものになったのは、故郷の都市を離れているジョイスのノスタルジアのゆえであると論じたことがある⁽⁸⁴⁾。しかし、「距離」を何よりも重視するキシユにとっては、物理的であれ心理的であれ、いかなる融合も是認できるものではなかった。ノスタルジアという副作用を抑えているのは、「いつでも望むときに帰る」ことであった。実際、年に一、二度はユーゴスラヴィアに帰っている。他方、「亡命」先のフランスに対しても、セルビア・クロアチア語で執筆しつづけることで、距離をとっていた。敬愛するアディと同じく、キシユもまた、二つのノスタルジアのあいだで闘い続けたのである。それでもなお、「亡命」後に執筆した作品『死者の百科事典』には、いくばくかのノスタルジアが潜んでいることを自ら認めているが。

パリとベオグラード、フランスとユーゴスラヴィア。この二つの空間のあいだに生まれた思想が、キシユの「中央ヨーロッパ」である。現実の世界とは距離を保ち続けたキシユが、自己の帰属を求めたのは、観念において実在する思想の世界、痛切な想像力が築きあげた世界であった。

83 Danilo Kiš, “Ne verujem u piščevu fantaziju,” in Kiš, *Gorki talog iskustva*, p. 281.

84 Zinovii Zinik, “Emigrantyia kak literatynui priem,” *Sintaksis* 11 (1983), p. 168.

『死者の百科事典』以後、キシユ自身が発表した小説はない。「アパトリッド」もまた、完成されないまま、引出しに眠ることになった。代わりに取り組んだのは、自らの人生を記録していくことである。頑なに語ろうとしなかった伝記的事実の一部を、1983年、「出生証明書」という表題で初めて発表するや、精力的にインタビューをこなして、自らの人生の歩みを語った。さらに、キシユは、「インタビュー」に新たな文学形式としての可能性を見出し、対話による伝記の構想に着手する⁽⁸⁵⁾。1987年に、手始めとして、「人生、文学」という題で掲載されたインタビューでは、「冷え込んだ日々」までの人生が語られている。キシユとインタヴューアラーが話をするという形式は、一見、普通のインタビューと変わらないが、遺稿から見つかった原稿から、内容はすべて、キシユの発想にもとづいているものと思われる⁽⁸⁶⁾。また、同じく遺稿から見つかった紙葉には、「ダニロ・キシユ、LIFE, LITERATURE, A Central European Encounter, Confidential Talk With Gabi Gleichmann」とタイプ打ちされていたそうである。しかし、この構想は、キシユの死によって未完のままに終わった⁽⁸⁷⁾。

このように、キシユが「亡命」してすぐのころに書いた「アパトリッド」は、中央ヨーロッパ作家の伝記という点で、「人生、文学」のヴァリエーションとみなすことができる。そして、同時に、キシユの晩年を暗示する「宿命」的な作品であった。

ダニロ・キシユにとって、「ジョイス的亡命」の代償は大きく、小説の執筆から遠ざかるほどのものであった。しかし、そのなかで、キシユは「記録」という新たな分野に挑戦する。家族にかかわる、ありのままの事実の再現と提示、それはこの作家が、これまできっぱりと避けてきたことである。その仕事に、晩年に、あまりにも早すぎる晩年に、あえて取り組むことになったのは、ダニロ・キシユの鋭敏で強靱な想像力が、人間的なものの記憶を痕跡にいたるまで抹殺する、暗黒の時代が再び到来しつつあることを、明らかに予感していたからではないだろうか。

85 1986年のインタビューで、キシユは、「スウェーデンの批評家でジャーナリストのガビ・グライシュマンと、いま、『人生、文学』、英語で言えば、『Life, literature』という本を書いています」と述べている。Danilo Kiš, “Džojsovsko progonoštvo,” in Kiš, *Gorki talog iskvstva*, p. 158.

86 Danilo Kiš, “Život, literatura (fragmenti),” pp. 325–331.

87 1989年、死の直前のインタビューで、キシユは次のように語っている。「もしかしたら本をもう一冊出版するかもしれません。自分の人生と文学について、年代順に論じるものになるでしょう。題名は、Life & Literature。英語で言ったほうがフランス語で言うより響きがいいので。」Danilo Kiš, “Jedini jugoslovenski svetski pisac,” in Kiš, *Gorki talog iskvstva*, p. 261.

Danilo Kiš and Central Europe: A Reading of His Incomplete Story “Apatrid”

OKU Ayako

In 1979 Danilo Kiš left Belgrade and settled in Paris. Unlike Milan Kundera who was forced to move out of his country because he was deprived of his right to participate in public life, Kiš migrated to France of his own free will. His “voluntary exile” or “Joyce-like exile,” was not only inspired by his quest for literature, but also by what he termed his “fate as a wandering Jew.” This paper focuses on Kiš’ “exile,” by analyzing his unpublished work “The Apatrid” (1980), and by examining how his understanding of the concept of “Central Europe” evolved.

“The Apatrid” is based on the life of Ödön von Horváth, a dramatist who was born in 1901 in Fiume and died 1938 in Paris, and called himself “a typical Austro-Hungarian of mixed-blood.” Kiš became interested in this person, probably due to the similarities in their background and thought. However, in order to keep the “appropriate distance” from the protagonist, Kiš renamed the hero of his novel to Német, and tried to create a story that is something between a documentary and a fiction, this being his continuous literary task. This superimposition of fiction onto the life of a real individual can be seen in the titles of the books the protagonist is writing: “A Man without Homeland” and “Goodbye, Europe.” The former is an expression synonymous with “The Apatrid,” while the latter is the title of an unfinished autobiographical novel by Horváth. In “The Apatrid,” Kiš shared with Horváth the adoration for Ady Endre, a famous Hungarian poet, who once lived in Paris, the city where Horváth, met his destiny: only four days after his arrival to Paris, Horváth (Német) dies in an accident, hit on the head by a falling tree branch. Little did Kiš know that he himself would achieve a symbolic death in Paris.

It is clear that Horváth (Német) possessed the properties of a “Central European” writer. However, Kiš did not use that or any other similar term in this work. His notion of “Central Europe,” though, may have changed during his life. Based on this assumption, the paper also analyzes the use of the word “Central Europe” or “Central European” and the like in his novels, essays and interviews. The term first appears in *Garden, ashes* (1965), Kiš’ third fiction novel, as follows: “the poor shopkeepers and grain dealers of central Europe and the Balkans.” In *The Hourglass* (1972), it appears not only in that form, but also in the phrase: “Central European Time.” In *A Tomb for Boris Davidovich* (1976), the term appears only once as an adjective for a small town in Hungary, and in *The Encyclopedia of the Dead* (1983) only twice in the phrase “Central European Jewish merchant.” It is evident from the narratives that Kiš used the word “Central Europe” in his fiction as a geographic term signifying a region and the Jews who lived in it. The same is true for his essays in the 1970s such as *The Anatomy Lesson* (1978), as well as his interviews.

It was after moving to Paris that Kiš started to use the term to denote the literary entity to which he belonged. His motive was to promote the Central European literature as a whole, especially to the West. In his essay “Variations on Central European Themes” (1986), Kiš analyzed “Central Europe” mainly from three aspects; the definition of the term, the relations between the region and its Jewish community, and exile. After admitting

the existence of numerous differences, negative aspects and contradictions within Central Europe, Kiš points out the common, transnational traits in it, which were, in his opinion, largely created due to the influence of its Jewish community. He then goes on to define himself as one of Central European writers who are aware of form “as a bulwark against the mayhem of barbarism and the irrational caprice of instinct.”

On the basis of these analyses, the paper concludes that Kiš’ “exile” was a method to overcome attachment to both Yugoslavia and Paris. While struggling with his feelings of nostalgia and attachment, he discovered his identity in the ideal of “Central Europe” which lies between Belgrade and Paris. It can therefore be said that Kiš, who maintained a distance from the real world, found his place of belonging in the idealistic world of thought built by his powerful imagination. The cost of his “Joyce-like exile” was, however, high – he could not continue writing novels. *The Encyclopedia of the Dead* was the last novel to be published by Kiš himself. “The Apatrid” itself was kept in his chest drawer incomplete. However, as a new attempt, Kiš turned to a different genre: a dialogical autobiography. This was an attempt to represent and recreate the bare facts about himself and his family that he had never presented before. This was also his clear sign that a dark age was approaching again, an age that forced him to tackle with his own autobiography.